

旧交ふたたび

杉田達雄



(理工学部教授・ドイツ語)

最近、柄にもなく、ふと立ち止まって過去を振り返り、しみじみとした時間を持つことがある。がさつなぼくにとっては本当に柄でもないことなのだが、ここ三年ほどの間に、なつかしい友との再会が続いていることにそれはよるのだろう。

ほんの数年だが、ぼくには銀行員だった時期がある。その頃、職場の山岳部に入り、週末には丹沢や奥多摩の山々を歩き、夏ともなれば三・四日かけて北アルプスを中心に高い山を縦走した。外国為替という複雑な業務と極めて世俗的な人間関係に傷んだ心を癒すのに、登山はまたとない安らぎだった。人間の卑小さと自然の雄大さを物言わぬ山に教えられて、ぼくはすっかり山のとりこになった。

自然とは無理のないこと。無理があるのは人間なのだ、と思うようになった時、ぼくはできるだけ自然に近付き、自然のふところに抱かれて、自然とうまく折り合いを付け、人間そのものをも自然の一部、自然を彩る風景の一部として見ようと思った。山岳部のリーダーもそんな人生観を持つ

飄々とした人だった。そしてぼくは、この人との出会いを幸運なものと思った。

だが、銀行はいつも山にばかり登らせてはくれない。東京オリンピック後の日本が急カーブで高度経済成長を遂げつつあった時期、仕事は多忙を極めた。その傍ら、外国語を半ば強制的に学ばされて、スペイン語やアラビア語に続いてドイツ語までやるはめになった。うんざりしつつも、気が付けばそばにはドイツ語の達人がいた。銀行員というより学者と言ったほうがふさわしいその人は、無謀にもまだABCすら知らないぼくに、いきなりヘルダーリンの「ヒュペーリオン」を読ませた。そしてドイツの文学や音楽や思想や絵画のすばらしさを物静かだが熱く語り、楽しませてくれたその人は、休職届けを出してさっさとスイスの大学へ行ってしまった。彼を送別する宴の時、当時、彼の愛用する最も優れていた「独和大辞典」を、記念に頂戴した。

その人とは帰国後、何度か会う機会があったが、いつしか音信は途絶えた。何年か後、すでに彼はこの世にいない、という噂

が風の便りに届いた。才能の誉れは高く、驕り高ぶることのないその人と束の間ではあったが同じ時間を共有し得たことを、やはりぼくは幸運だったと思っている。今、ぼくがこうしているのは彼の大きい影響によるのだ。そしてあの「独和大辞典」は、若くして逝った友の形見として今もぼくの書棚にある。

時は確実に流れた。あの時、自然に身を任せていてもなんら不満があったわけではない。むしろ、そのことをこそ望んでいたのではなかったか。だが若気の至りとでも言うのだろうか。浅ましく、かつ浅はかだったぼくは自分のエゴをむき出しにして、一度の人生だから、一度しかない自分の人生なのだから、将来自分はこうありたい、このように生きてみたい、とひたすらに願ったのだ。あのほかに遠い若き日の過去のぼくを、ぼくはなつかしくも、またいとおしく思い出す。希望どうりの人生を生きることが、たとえ叶わなかった今でも。

ある日、日比谷で映画を見た帰り、ある人と公園を歩きながら、いつ言おうか、いつ言おうかと逡巡し、ついに言い出せないまま、有楽町で別れるとき、その人の後ろ姿に思い切って「銀行、辞めようと思う」とぼくは言った。その人は、フェルメールの「青いターバンの少女」のように、「え？」と言って振り返り、瞬時の後、つぶらな瞳を輝かせて「きっと、そうなると

思った。いいわよ。応援するわ」と笑顔を見せ、小走りに国電の改札口に消えていった。その時の彼女の耳に白い真珠のイヤリングが揺れていたのが今も脳裏に鮮やかである。ついに言ってしまった、と思った時、胸のつかえがおりて晴れ晴れとした気分になり、ぼくは地下鉄の階段を降りて行った。

やはり時は確実に流れていた。三年前、あの山のリーダーから電話があり、定年を迎えるT氏がある大学で「金融論」を担当することになり、大学のことにぼくから話を聞きたい、というのだ。そういえば彼もよく山に登っていた。また、その翌年には、大半を南米で過ごしたポルトガル語の大家が、今や毎日が日曜日となって、近くの山歩きを楽しんでいるという。外為の手ほどきをしてくれた彼は、ぼくが山なぞに行くのを冷ややかに見ていたのに、と思い出して時の流れの変化に思わず苦笑させられた。

旧交再び。今、日銀から来た人を交えて、かつて登ったアルプスの山に再度登る計画を立てて、実行している。一昨年は燕岳～常念岳を、昨年は穂高連峰を縦走し、今年は劔岳を予定している。青春の日に出会い、長い空白の時を経て再会した彼らとの登山が、いつまで続けられるか解らないが、この旧交を大切に温め、彼らの第二の人生に、誠実に付き合っていこうと思っている。

